

アメリカ史研究における“動物”の再考 — “ポストヒューマン”の生成を求めて —

*Reconsideration on 'Animal' in American History
— A Search for Becoming 'Posthuman' —*

白石 (那須) 千鶴 SHIRAISHI (NASU) Chizuru
(音楽領域)

1. 初めに

(1) 本論文の概要

本稿は、アメリカの歴史分析に人間以外の「動物」を議論の対象に入れることで同分野の研究をさらに実りあるものに発展させるための試論である。アメリカでは他の英語圏／西洋諸国と同様に動物の処遇改善を求める議論や活動が盛んに行われており、その活動や議論がさまざまな研究分野においても取り上げられている。アメリカのような多民族・多人種による多文化社会の歴史研究においては、動物の扱いをめぐる議論及び運動も、人種・民族・ジェンダー・階級の観点から分析することが不可欠である。例えば「動物の権利」論が男性中心主義的側面を持ち合わせていることや、動物擁護運動の担い手たちの大半が白人中産階級であったことから、動物擁護の言説や行為をジェンダーおよび多文化主義の観点から批判的に検証する必要がある¹⁾。本稿はこうしたこれまでの研究の枠を拡張、動物の問題をめぐる議論が人間社会の問題を考察する上で必要不可欠な役割を果たすことを提示し、人間社会の問題分析における動物の議論の必要性を論じた。

そのために次の3点を中心に議論を展開する。第一に最近の日本のアメリカ史研究者による動物を歴史分析の観点に取り入れた論文を取り上げ、その中で「ポストヒューマンへの発展」を提案する議論がなされていたことに注目し、その「ポストヒューマン」の議論の有効性と問題点を中心に当該論文を検証する。これまでの研究では「脱人間中心主義」を掲げることなど不可能とされてきたことに鑑みると、「ポストヒューマン」の議論へ繋げるというのは異次元の議論のように思われたと同時に大いに興味をそそられたためである。そこで「ポストヒューマン」なるものの議論へ繋ぐとはいかなることを意味するのか、そもそも「ポストヒューマン」とはいかなる概念なのかをあわせて批判的に検証する。二点目には最近の動物の議論に新しい視座を提供する「障がい理論」からの研究および「ホロコースト研究」からの議論を取り上げ、それらから見出される意義を「ポストヒューマン」という新たな枠組構築の可能性の観点から検証する。最後に以上の議論から課題を抽出し、今後の展望を提示したい。本報告はこうした内容から「動物」の議論を人間社会の問題に位置付ける必要性と重要性を提示し、その位置付けのための方策を検討す

ることにより今後の研究の突破口を見出そうとするものである。

(2) 「動物」を議論すること：「メタファーとしての動物」と「実態としての動物」

人文科学の研究での「動物」というテーマは、さまざまな次元での扱いが存在しているが、大きく分けると「メタファーとしての動物」と「実態としての動物」の二つに集約できる。前者は哲学の議論をはじめとし歴史研究においても取り上げられ「人間を映し出すための概念」としての「動物」が社会でどのように意味付けされ、いかなる影響をもってきたかが分析されている。例えば歴史研究ではジェンダー研究、人種研究、ポストコロニアル研究などにおいて、人間社会における差別の問題にいか「動物」の概念が関わってきたかが議論されている。他方「実態としての動物」を扱うこととは、生きた動物そのものの処遇をめぐる議論という形で「身体を伴う動物」の問題を検討することである。動物の処遇を改善しようとする運動での議論およびその運動についての分析もここに含まれる。こうした「メタファーとしての動物」と「実態としての動物」の議論は明確化のためには分けて議論される必要があるが、本稿の検討材料の一つでもある「ポストヒューマン」の議論（ポストヒューマン理論）には、この両者が同時に視野に入っている必要性がある。そのため本報告では両者を注意深く区別しながら両者を共に検証対象とする。加えて、動物をメタファーとして扱うことに終始する議論は「ポストヒューマン」の構築には不十分であることも論じたい。

2. 分析ツールとしての「動物」vs「新しい人間像」の議論の糸口としての「動物」

(1) 人種・ジェンダー・「ヒューマン」の分析ツールとしての「動物」

日本のアメリカ史研究の中で動物を取り上げた研究は実はあまり多くないが、「ポストコロニアリズム」を表題に冠して2021年に刊行された書籍の中の「ポストコロニアルからポストヒューマンへ」²⁾という論考において動物が取り上げられ論じられている。ここではメタファーとしての動物が、歴史の中で人種やジェンダーの負の規定にいかに関わってきたかが議論されている。この論者は帝国主義による植民地化の行為がいか白人男性以外の人間の排除の行為へと繋がっていったかを、人種・ジェンダーの観点から分析するにあたり、そこで「動物」というメタファーが深く関わってきたことを、近年注目される「交差性」という概念を取り入れて論じている。ここで特に注目したい点は、次のような人種と動物の交差性の議論である。

すなわち上記論者は、「種差別」に対する抗議として提起されたピーター・シンガーの「動物の権利」の議論の問題性、さらに最近の「動物の権利」運動による奴隷制のアナロジーの議論の問題性を取り上げ、「動物の権利」論が動物しか見ていない点に元凶があることを指摘した上で、さらに「ブラック・ライブズ・マターズ」の運動において抗議する黒人たちに警察犬をけしかけるという事例を取り上げ「種差別主義と人種差別主義が単純な

アナロジーではなく両者の他者化が相乗的に構築補強されてきたこと」を指摘している³⁾。

その上で、さらに人間社会には、人種やジェンダーの括りでは立ち現れてこない他の「動物化」された人々の不都合がさまざまに存在することを食肉屠殺場の労働者および監獄の囚人を取り上げることにより問題提起し、そうした人々の「死の政治」に投げ込まれる現状を取り上げ、これらの問題まで視野に入れるためには「ポストコロニアル」の枠組みから「ポストヒューマン」の枠組みが必要であると提言している⁴⁾。

この提議は、人間社会の問題分析の議論に「動物」の存在を視野に入れる観点がポストコロニアルの議論からさらにより大きな枠組みでの議論を開くのに必要であることを提起している点において非常に示唆に富んだ内容である。しかしここで一つ重要な問題点を指摘したい。キンバリー・クレンショアの提示した「交差性」の概念の捉え方についてである。彼女は黒人であり女性でもあることから人種単体の議論では二重に差別を受ける黒人女性の問題を議論しきれていないとして、この交差性を提案している⁵⁾。すなわちこれは、人種の抑圧からもジェンダーの抑圧からもともに解放されることを目指した概念である。他方上記の議論では、例えば「人種と動物の交差性」の議論で顕著なのだが、動物と同じ扱いを受けたとする奴隷の経験、および今日の警察犬に暴力的に追われる黒人の不条理についての「動物と人種」の相乗性の指摘は、人種の問題にとって動物がいかに疎ましい存在であるかを浮き彫りにしたに過ぎず、交差性の議論となっていない。さらに、「動物化」される監獄の囚人や過酷な労働を強いられて「モノ」のように使い捨てられる食肉屠殺解体場の労働者たちについても、いかにその人々の扱いが「人権」という概念に照らし合わせて不当であるかが問題化されているに過ぎない。とくに、屠殺解体場で「殺されるウシと殺す労働者の共通性」を「使い捨てられる生」⁶⁾と指摘する議論では、むしろ文字通り殺され身体を食糧として利用される動物の境遇を形骸化していないだろうか。屠殺解体場の動物たちが殺されることは当然視するだけで何も問題化してはいないからである。動物の実態を問題化しないまま「動物のように扱われ、死の政治に遺棄される存在と化している」⁸⁾と指摘することは、彼らは動物ではなく人間であることを確認し人間性の回復を図るだけの道筋を理論上進み最終的には動物との連動性の切り離しを主張すれば問題解消できるのだ。

この点はポストヒューマンの議論において重要なので強調するのだが、過酷な立場の人間の処遇の不当性を表す尺度に「動物」のメタファーを利用するだけのこうした議論では、本来期待される意味での交差性の議論とはならないことをここで確認しておきたい。二つの問題を「交差する問題として扱う」とは、次のことを意味するはずである。すなわち交差する二つの問題は、交差するがゆえに共に解放・救済されなければどちらの問題も解放・救済されないと認められ、同等の重要性を持つものとして捉えられるはずである。そうでなければ交差されてはいないということになる。あるいは「交差している」と捉える必要性はないはずである。厳密な意味で交差された問題であるなら、共に問題が解消さ

れなければならないのである。この点から精査すると、動物とジェンダーの問題は、あるいは動物と人種の問題は本当に交差していると認識されているのか、疑問が残る。

しかしながら、ここではこの「交差性」という用語を使って議論が開かれた以上、これを確かに「交差した問題」として動物が扱われ始めている重要な起点と捉えたい。その上で、それではこの交差する「動物」と「人間」の問題を解決する方向性としていかにして「ポストヒューマン」の議論が有効なのか、その問題に移りたい。

(2) 「ポストヒューマン」なるものとは？

「ポストヒューマン」は、最近始まった議論であるが、ここではフェミニズム理論家のロージ・ブライドッティが最近まとめた『ポストヒューマン』⁹⁾という文献で述べられていることを参照する。ブライドッティが論じる「ポストヒューマン」とは、要約すると以下ようになる。これまで「人間」なるものに尺度を与えた人文主義（ヒューマニズム）の一連の規範が今では望ましいものでも妥当なものでもないという認識に立ち、その人文主義と共存関係の価値規範である「人間中心主義」も退けて、一元的な生氣論を基礎にする議論である。人間を動物や非生物、さらにはテクノロジーとの連続性のうちに捉える新しい人間像がブライドッティの提示する「ポストヒューマン」である。これまで人間の歴史を通して認識され規範とされてきた「ヒューマン」は、ヨーロッパ系白人男性を理想とするもので、それは結局のところ「人種化・性別化・自然化され抑圧された暴力的な差異を、その理想像であるヨーロッパ系白人男性以外の人々に押し付けるだけのもの」であった。「それが帝国主義的植民地活動を焼き付け、その差異化された他者が使い捨て可能な身体という人間以下の地位に還元されてきた」と、ブライドッティは批判している¹⁰⁾。啓蒙主義以降のヒューマンは結局こうした絶望的な「人間像」となっていると捉えるところから議論は始められるのである。こうした「人間論／ヒューマニズム」に対する批判は、これまでもすでにフェミニズム研究やポストコロニアル研究、人種研究で盛んに議論されてきたが、ブライドッティはそれらの「新人文主義」の議論の助けを使いながら新しい「ポストヒューマン」を生成しようというのである。これが、ブライドッティが議論している「ポストヒューマン」の概要となる。

これまでの「ヒューマン」と異なる最も大きな点は、スピノザの一元論をもとにするところである。つまりデカルトからカント以降脈々と西洋思想に大きな影響を与えてきた二元論の議論から決別し、それまで対立項目とされてきた「自然」と「文化」を連続体として捉える枠組みの提供をしようというのだ。具体的にポストヒューマンの主体として構想されるのは、「動物への生成変化としてのポストヒューマン」、「地球への生成変化としてのポストヒューマン」、「機械への生成変化としてのポストヒューマン」である¹¹⁾。つまり動物や自然、さらにはさまざまな科学技術と対座する存在として人間を捉えるのではなく、それらと連動する存在として主体を捉え直すことを提案している概念だと理解す

ることができる。

ブライドッティのポストヒューマン論は抽象的な議論が続き、具体的イメージとして捉えにくい印象が残るが、ブライドッティの最も注目すべき点は、自然と文化を対極に捉える二元論に対する批判として、それに対抗するために、これまで二元論によって差異化されてきたものとの境界線を暈し一元的に捉える新たな見方を提示しているところである。しかしそれではその「境界線を暈す」とはいかなる行為なのか？ それを実現させるのに有効なのが「交差性」という概念だと捉えてみたい。これまでは別の問題とされながら実は深層で絡まっている問題を、共に解放・救済する行為から始まる議論がポストヒューマン理論と捉えることができるからである。

(3) 交差性を糸口に

以上のようなブライドッティのポストヒューマン論を参照しながら動物の議論にどのように応用できるのか考えてみたい。ブライドッティは『ポストヒューマン』において、これまでの「万物の長としての人間」という思考そのものを返上することも「ポストヒューマン」構想の動機としているため「ポスト人間中心主義的ポストヒューマン」という表現を多用しながら議論している。したがって「ポストヒューマン」は「ポスト人間中心主義」であることを条件としているともいえよう。しかしこの「ポスト人間中心主義」は注意を要する用語である。これまでの全体主義的で人種主義的な環境思想も「脱人間中心主義」を提唱していたからである。つまりどのように細心の注意を払えば非独裁的で非独善的で非全体主義的な「ポスト人間中心主義」が実現するのか注意深い考察が必要である。こうした現在の議論状況を一言で表すなら、「ポストヒューマン」とは生成途上の概念であると捉えるべきであろう。

それでは今の段階でどのようにこの「ポストヒューマン」理論が援用できるだろうか。つまりどのようにしたら自然と文化が連動した枠組みの人間像の生成に参加できるのか。それを考えるのに重要なのがクレンショーの「交差性」の概念だと仮定したい。しかも厳密な意味での「交差性」である。ただ絡まっているから解きほぐし、いらぬものを切り捨てるという分析ではなく、いかに扱えば両者が共に同等の問題性として扱われ解放されるのかを考察することである。例えば、食肉屠殺解体場で使い捨てられ「動物化」される労働者の問題は、それを「人間の動物化」と「動物搾取」の交差性の問題と言及しながら単に「非人間的なメタテキストとして語る」¹²⁾のではなく、搾取される動物の実態も解消しようとする真摯な振る舞いを実践することによってのみ解決されると考える。これが本報告の「初めに」で言及した「メタファーとしての動物の扱い」と「実態としての動物の扱い」の両者が議論の視点に必要なだと述べた理由である。

つまりポストヒューマンの視点は、動物を「使い捨てられる人間」の問題に関わっていると指摘するために言及して終わるものではなく、その問題解消のためには両者の問題解

決が必要であることに気づかせるのが「交差性の概念」の有用性であり、その解消を実現する振る舞いがポストヒューマンの生成につながるのである。換言すると、差別される人間に動物のメタファーなり実態が絡まっていることを指摘するだけの議論は、これまでの抑圧的で暴力的なヒューマンイズムの枠組みの「からくり」が「動物化の思考」であったと指摘したに過ぎず、ポストヒューマンの議論には繋がっていない。なぜなら人間と動物を分かち思考は何も変わらず、むしろその境界線を再生産するだけだからである。例えば食肉動物の解体作業を完全に機械化して人間の関与を可能な限り縮小したらどうなるだろうか。動物への搾取は残されたまま労働者の人間性の回復は実現されるが、動物と人間の境界線の明確化がなされるだけでどこにもポストヒューマンの兆しは見えてこない。それではどのようにすると人間と動物の問題が「交差性の問題」として扱われ、ポストヒューマンの主体の生成に貢献できるのか。この問いに対する重要なヒントを次の障がい理論を取り入れた研究およびホロコースト研究から示したい。

3. 「障がい研究」と「ホロコースト研究」が提供する議論：「ポストヒューマン」のための新しい主体の生成として

(1) 「動物性は人間性にとって必要不可欠」

動物の問題と障がい者の問題の「交差性」を取り上げてその両者の問題解決に理論と実践の両面で見事に貢献しているのがスナウラ・テイラーの『荷を引く獣たち』¹³⁾である。理論家であり芸術家でもあるテイラーは、自ら障がいを負うという出自から、障がい者の問題を動物の問題と交差させ、その両者を共に解放するための振る舞いとしてヴィーガニズムを実践すると共にその交差性の議論を開いている。彼女の議論で最も注目すべきは「健常者中心主義 (ablism)」という批判観点である。彼女の「健常者中心主義」批判が、いかにして近代の排他的で暴力的な人間像の実態に重要な亀裂を入れ新しい人間像の提供をしているのか。それがいかにして動物と連動してポストヒューマンの主体の生成に繋がっているのか。こうした点から彼女の議論を整理する。

テイラーの主張を要約するなら「動物性は人間性にとって必要不可欠だ」¹⁴⁾という一言で表現できよう。彼女はこの提言の意義を、障がい者が歴史的に置かれてきた状況を多数掘り起こして実証的に議論している。例えば、彼女は「フリークショー」や聴覚障がい者のコミュニケーション手段である手話の歴史的扱いを取り上げ、歴史の中で障がいを負う人たちがいかに「動物化」されてきたかを描き出していく。さらには彼女自身が幼少期に友達から指摘されてきた「動物との類似性」をも取り上げ、「否応なく動物性が刻み込まれてきたこと」と向き合いながらそこから「自らを肯定することに動物をも肯定することが内包されている」という視点に立つのである。「動物性は人間性にとって必要不可欠」という見地はこうした議論から到達するのである。

この主張についてはここで確認すべき重要なことがある。まずこれは、これまでの負の

観点であった「障がい者と動物を共に語る」ことを想起させる点、すなわちこの同一視こそが、差別の元凶だったという点である。さらに別の角度から、動物の置かれた状況を奴隷制やホロコーストに擬えてその過酷性を訴える動物権運動に対してなされた平坦化／軽視化の批判がここにも向けられないかという問題である。

しかしながらテイラーの議論を理解するためには従来のこうした議論よりさらに踏み込んだ分析が必要である。そこには新しい観点が見出されるからである。テイラーの手法は、障がい者が動物化されてきたことを障がい者と動物の問題の深く絡まるその「交差性」を議論の対象とした上でその両者の解放を目指すものである点に注目する必要がある。すなわちそこに人間と動物の間に引かれていた境界線を捉え直し「ポストヒューマン」としての主体の生成を実現する糸口が見出されるからである。

そもそも障がい者が「動物化」された基準は何であったのか？ それがここで「健常者中心主義」と訳されている「ablism」すなわち「できること」による線引きである。できないことの何が問題なのか？ 能力主義・効率主義の社会では、できないことは「依存」する存在とされ「役に立たない」あるいは「社会の負担」になるとされ、できることが高く評価され逆にできないことは軽視され貶められる。こうした線引き思考はさらに、「できること」の高評価を明確化させるために「できないこと」を「動物化」しスティグマ化するのである。

こうした価値体系の中で動物と切り離す議論をしても、健常者中心主義が変わらない限り、線引き行為に終止符が打たれることはない。しかもどの人にとっても「できる」ことが終生継続されるわけではないのが現実である。社会が「できる主義」である限り、生きにくさは変わっていかない。すなわち抑圧の元凶は「できる主義」つまり「健常者中心主義」の価値観そのものであり、動物ではない。しかもこの「できる主義」による抑圧は全ての人間に対する抑圧にもなるのである。テイラーはこうした重要な視座を提供する。

こうした線引きは古き悪き時代の発想であるばかりでなく、今日においては例えば「定型発達主義」と呼ばれる区分が新たな線引き思考を生み出している。「定型発達の（自閉症でない）脳構造を持つ人に特徴的な認知処理形態」に価値を置くこの基準は、障がい理論でその問題性が議論されている。この基準が個々人の間に正常／非正常を区別するのに機能しているのである。テイラーは、この基準が人間の間だけでなく「動物」というカテゴリー内にも位階を作り上げていき、種差別主義を生み出し動物の搾取を正当化していると指摘する¹⁵⁾。

動物が理性的な存在ではないという理由から人間より劣った存在であると位置付ける議論に対する批判は、もちろん、近代以降の人間を位階の頂点に置くデカルトの二元論的人間観に対する批判としてすでに他の動物擁護論で指摘されたものだが、テイラーの指摘の意義は、「定型発達主義」という障がい理論に依拠しながら、動物をめぐる既存の言説に異議を提起しようとする点にある。すなわち障がい理論を人間以外の動物の身体をも含む

議論に拡大させ、動物を障がい者と共に解放しようとしているのである¹⁶⁾。

従来の障がい者運動は動物との切り離しを主眼として展開されてきたと言われている。テイラーはそうした障がい者運動が動物の問題に無関心であったことにも警鐘を鳴らしながら、動物にも関心を示す障がい学研究を掘り起こし、「障害者を周辺化する健常者という概念が、動物たちに対しても同じように機能する」という最近の障がい学の指摘を引用し次のように議論する。

人間は神の似姿において作られたとする信仰から、人間が進化の頂点であるという信念まで、私たちの人間中心主義的な世界観は、健常者中心主義によってささえられている。

健常者中心主義は、人間の能力が疑いの余地なく、動物が持つ能力に勝ると考えることを可能にする。人間の動作や思考プロセス、存在のあり方が動物たちのものより洗練されているのみならず、人間に価値を与えるものだという考えを健常者中心主義は増長させるのだ。¹⁷⁾

健常者と非健常者を区分する健常者中心主義は、特定の能力や力量をもとに、人間と人間以外の動物の間に境界線を引くことにも機能し、動物と関連づけられ抑圧された人々を周辺化するのにも機能したと論じている。こうして健常者中心主義と戦うことは、障がい者だけでなく動物の解放にもつながるとする観点を提供するのである。

障がい理論を人間以外の動物の身体をも含む形で拡大させることを目指すと同時に、テイラーはさらに、動物擁護の運動や理論をめぐる言説の健常者中心性も鋭く露呈させている。例えば、PETA（動物の倫理的扱いを求める人々の会）は動物を守るための運動において、「自閉症になった？」と呼びかけるキャンペーンを展開した。これは酪農産業が乳製品の消費を促すために「牛乳飲んだ？」と気軽に呼びかける広告を出したのに対抗したもののだが、テイラーはそのPETAのキャンペーンに対し、「一般に流布している障害への恐怖心や偏見を利用して動物の権利を守ろうとする手法」に健常者中心主義性を鋭く指摘している¹⁸⁾。また動物を単なる犠牲者として扱い「声なき者のための声」になろうとする動物擁護者たちの姿勢にも「パターンリズム」を指摘し、「動物たちは私たちに絶えず訴えかけている」¹⁹⁾のだが、人間がただ聴こうとしていないだけだと批判している。その「聴こうとしない姿勢」にはまさに、言語を使う「正しい」コミュニケーションのあり方を「聴くに値する声」と扱う健常者中心主義が潜んでいることをテイラーは見逃さないのである。

動物擁護論者への問題提起で最も注目すべき事例として、テイラーが直接対座した時のピーター・シンガーの言動が挙げられる。動物への配慮の必要性の根拠に動物の「能力」を強調するシンガーは、動物を単なるモノとして扱う社会に対して「種差別である」と最初に糾弾した理論家だが、障がい者団体から最も嫌われた動物擁護論者でもある。テイラーはシンガーの擁護論の主張を丁寧に読み解き、彼が決して「重度障害児の安楽死を肯

定しているわけではない」と分析した上で、彼のパークレーでの講演で直接、障がい者の存在意義を提起した。それに対し、シンガーは障がい者が人間に不都合であるとする視座を顧みることなく、健常者中心主義を貫くのみであった²⁰⁾。

シンガーをはじめとする従来の動物権利論者の主張が「人間中心主義的な位階性を拡大する理論」であるため差別から自由になれないことは、プライドッティも指摘している通りである²¹⁾が、テイラーは、障がいを「医学的治療の必要な存在」と限定することの問題性からさらに次のように鋭く批判している。すなわち健常者中心主義の動物権論者の問題性は「正常で健常な身体」を前提とし、そうでなければならぬと絶対視／当然視するような「障がいに対する従来の見方」にあると指摘する²²⁾。人間と他の動物の差別をいくら非難しても、「健常」と「非健常」に線引きをすることの問題性に無関心なままではその差別の元凶である線引きの発想を自ら再生産しているに過ぎず、種差別の解消は実現されないことを、テイラーの健常者中心主義批判の観点は明確に提示している。

テイラーの批判は、「自律した自然」を賛美する環境思想にも向けられている。野生動物を称賛する環境思想家のJ. ビアード・キャリコットは、依存的で飼慣らされた家畜動物を「不自然で依存的で愚かである」として家畜動物の待遇改善を求める動物解放家たちの活動を「椅子やテーブルの自然行為を語るのと同じくらい意味がない」と批判している²³⁾。それに対し、テイラーは、依存する身体に対する抑圧への異議申し立てを、共に依存する立場から代弁し、従来の「自然」概念に健常者中心主義の要素が潜むことを指摘し、「依存」の概念について深い洞察を行うのである。すなわち「ケアされる側」からの視点を取り入れることで、「ケア」の概念に新しい光を当て、フェミニストの動物倫理学者たちが重視するケアの対象への配慮の必要性の議論、および種を超えた共感の哲学者が主張する「共感」の重要性の議論が、重度障がい者の正義に焦点を合わせる障がい理論と重要な共通点を持つことを見出し、以下のように論ずる。

差異に対してこのように親密かつ個人的な次元で留意することは、動物解放と障害解放に関する対話を、苦痛や依存という限定的な語りから、この社会で人間と動物が共に栄えることのできる、アクセス可能かつ非差別的な空間を創出する企図にかんする、より急進的な議論へと発展させるために不可欠なステップなのだ。²⁴⁾

テイラーのこうした障がい理論からの動物の正義をめぐる議論の展開は、健常者と非健常者の線引きを解消すると同時に人間性にも動物性が必要であることを提唱することで「動物との生成変化する主体の構築」の実例となっていることをここで指摘したい。こうした新しい主体の生成は、これまで規範とされた近代の理想的人間像のモデルからは排除された者たちがなし得る重要な役割のように思われる。次にホロコースト研究者チャールズ・パターソンによる『永遠の絶滅収容所』を取り上げる。

(2) ホロコーストと動物の処遇に「交差性」を見出すことは可能か？

パターソンは、人間に対する暴力と動物に対する暴力の連続性の分析をテーマとし、動物への暴力がいかにして人間への差別に繋がっていったかを明らかにするために、ホロコースト研究の成果から両者のつながりを描き出している。その上で、ホロコーストのサバイバーたちまたはその子孫に動物擁護活動家が誕生していたことに着目し、動物化されて残忍な扱いを受ける立場に置かれた人たちからの動物の搾取・暴力の解消追求行為の意義を論じている²⁵⁾。このパターソンの議論においても、「ホロコーストや奴隷制という人間が受けた過酷な経験を平坦化し軽視する行為」との批判が当たるのか注意深い検証がまずは必要である。

そこでまず動物愛護団体が畜産動物の苦痛を訴えるのにユダヤ人のホロコーストや黒人へのリンチを引き合いに出したのに対して向けられた「平坦化」の意味を確認しておきたい。これは一つには犠牲者の苦痛を矮小化しているというユダヤ人団体や黒人団体からの批判であった。さらに差異を平坦化し偽りの等価性を生み、「奴隷制やホロコーストを置き換え可能な事例に抽象化する」という批判である。「痛みや苦痛、あるいは不当で悲惨な境遇が動物の苦痛と類似されることは、安易な置き換えとなり、形骸化してしまう現象が起こる」と指摘されているのである²⁶⁾。

他方、パターソンはナチズムの虐殺行為を可能とした思考に、動物への暴力と搾取があり、それがメタファーとしてもまた具体的方策としても応用されたという点に注意を向け、両者の問題性は共に扱われる必要があると主張している。例えば屠殺場の解体作業方法を自動車組立工場の流れ作業に応用して生産の効率化を図ったフォードは、ナチスの絶滅収容所の設計に大きなヒントを与える直接的関係を持っていたこと、さらにはナチスのホロコーストの思想的支柱となった優生学研究が動物を対象とする研究から始まっていたことなど、動物への搾取・暴力が人間への最悪の暴力に繋がっていった事例がこのパターソンの議論には多数取り上げられている²⁷⁾。

こうした最悪の出来事から学ぶためには、そこに動物への暴力が深く関わっていた以上、平坦化する／形骸化するという次元の議論で終わらせるのではなく、もっと踏み込んだ分析が必要であることをパターソンの議論から読み取る必要がある。例えば、ホロコーストや奴隷制を動物の不当な扱いのメタファーに用いた動物擁護運動の主張を「差異を平坦化し偽りの等価を生み」²⁸⁾人間の苦痛を軽視すると指摘するだけの議論では、そもそもポストヒューマンの議論へと繋がってはいかない。人間と動物の間に引かれた境界線の問い直しの議論を拒否し続ける限り、ポストヒューマンの議論は開始されないからである。従ってここでは、ポストヒューマンの新しい主体の生成は、両者の問題の交差性を深く掘り下げた議論から始まるという側面に、注意を向けたい。

そもそも平坦化／軽視化／形骸化するという批判の基準は、人間を万物の長として優劣の尺度に用いた価値観に起因していることにここで留意する必要がある。なぜ「動物の苦

痛と同一視すること」が「人間の苦痛を平坦化する／形骸化する行為」になると糾弾されるのか。理性的な生き物である人間を万物の頂点に位置する存在と見做し、他の動物とは境界線を引いて区別されるべきものとする立脚点に立ち、その基準から最も理想的な人間像とされたヨーロッパ系白人男性を模範的存在と見做したかつての基準を用いて、そこから外れる存在を「動物的」として差異化し排除した、その価値基準そのものに則っているからではないだろうか。その境界線を引く価値観そのものを問題化することなく「人間」と「動物」の間の境界線をただ自明のものとする議論では「ポストヒューマン」の議論へつながる道は遮断されたままであることを指摘したい。

他方、ここにはポスト人間中心主義を実現させるための道筋に大きな壁が存在していることも見落とせない。ブライドツティは「わたしたちはすでにポストヒューマンになっている」²⁹⁾と言及しているのだが、例えば上述のように、ホロコースト関係者の中には動物保護・権利団体による動物とホロコーストの問題の同列化をよしとしない声が存在するのも事実である。ホロコーストや奴隷制の被害者やその関係者たちから動物との交差性を平坦化の問題があると捉える厳しい批判が出されること自体に、ポスト人間中心主義的なポストヒューマンの主体の生成が必ずしも容易ではないことが示されている。動物と同列化されたことで不当な扱いを受けた被害者が動物との境界線を量すことに反発するという現象が存在する限り、両者を共に解消すべき問題として同列に扱うことは容易ではない。この両者の交差性への拒絶が従来の人間中心主義からの脱却、すなわち人間を万物の長として動物を差別化の基準とすることからの脱却において大きな壁となっていることが見て取れる。

しかしこの点についてはさらに別の側面からもう一点指摘したい。動物を遺棄されて当然のものと扱い続けることの問題性である。動物が遺棄されるもののメタファーとして位置付けられることの問題性が顧みられずそうした遺棄される動物の実態が存続する限り、「遺棄される存在」へと追いやられる新たな存在に連動していく余地を残していくことになるからである。パターンソンはホロコースト研究を踏まえて人間と動物の連続性を取り上げ、共に問題解決の対象とすることを提起しているのであるが、それはそもそも動物への残酷な扱いが平然と行われるシステムの存在が人間へ波及した点を重視するからである。「死に追いやられる存在」として扱われる動物の身体を問題化しないままでは、人間の差異化・差別化が動物化と深いところで関わる限り、遺棄される人間の問題が出現し続けることをパターンソンの議論は示唆している。動物と人間の問題が絡まり合って交差する問題として存在する以上、その両者の問題を共に解消する必要があることをここで強調したい。

4. 今後の課題：「身体と感情を伴った動物」の「誕生」に向けて

最後にアメリカ史における動物をめぐる議論のあり方について考察し、今後の発展の糸口を探りたい。これまでの日本の米国史研究において動物をテーマとする場合の立脚点

は、「メタファーとしての動物」の議論が主流であった。しかし今回取り上げた「ポストヒューマン」の主体の生成のためには「実態としての動物」を議論の対象にすることが不可欠である。なぜなら、ポストヒューマンの主体の生成のためには、すなわち「交差性の問題」として議論するためには、動物の問題を人間の問題と共に解消する必要性のあるものとして捉える観点に立つ必要があるからである。従って、動物を単なるメタファーとして捉えるのではなく、「身体と感情を持った動物」として捉え、そうした動物と人間の関係、生き物としての動物の処遇をめぐる議論、動物に対する人間の感情などに焦点を当てることが重要な切り口となるはずである。

本稿で取り上げた「ポストヒューマン」なるものの議論は、形成途上の議論ではあるが、少なくともブライドッティの議論は、動物が遺棄されるべき存在の領域尺度であり続けること自体を問題とする視座を提供している点に新しい議論の糸口が見出される。障がい理論と自らの経験から「動物性は人間性にとって不可欠」と鋭い指摘を提示するテイラーの議論は、ブライドッティの「ポストヒューマン」の主体の生成に参画する重要な実例と評価することができる。さらに、ホロコースト研究の成果から動物の問題への問い直しをおこなうパターソンの議論は、最近の動物擁護運動とホロコースト関係者との不和の関係を超越して共に議論する必要性を提示していることも示唆に富む。不当な境遇に置かれた存在同士の分離ではなく連帯こそが、これまでの差別的な人間像からの脱却の出発点となるからである。

そうした新しい議論の成果を踏まえて次の三点を今後の課題としたい。人間の身体と精神／感情の問題を問い直す障がい学に基づく動物と人間の交差性の議論から、動物を「身体と感情を伴った存在」として捉える視点を参照し、動物をメタファーとして捉えて議論することが主流となっている従来の歴史研究のスタイルを転換することをまず第一の課題としてあげたい。2点目は感情／情緒の問い直しである。精神という表現を取るとは、精神活動が人間に限定された活動であるとされていることから人間以外の動物が持つ情緒や感情を看過する議論となる。しかし今日の歴史研究において「感情」の捉え方も問い直しが行われていることも視野に入れると、動物の感情や情緒に注意を払うことは近代の理性偏重の価値観から脱却した動物の捉え方が可能となるはずである。こうした視点に立つ歴史研究をおこなうことにより「身体と感情を持った動物」の概念を構築することを3点目の課題としてあげたい。

5. むすびにかえて

「ヒューマン」の概念の問い直しや人間と動物の境界線の議論は、今回取り上げたブライドッティ以外の理論家たちにも盛んに取り上げられている³⁰⁾。近代以降、人間の価値が動物の価値を否定することで確認されてきたという「犠牲の構造」³¹⁾によって成り立ってきたこと自体が、近年熱い注目を集めていることは間違いない。こうした議論を今後も注

視していきたい。

注

- 1) こうした観点から本稿筆者はこれまで次のような研究をおこなってきた。拙稿：「19世紀前半期アメリカの家庭向け書物の中の動物と家族——「父親」の表象に焦点をあてて」『国際経営・文化研究』第21巻第1号（淑徳大学国際コミュニケーション学会，2016年）：269-28頁／「動物利用についてのポストコロニアル分析の試み——19世紀アメリカの毛皮取引と大平原部族の変容を取り上げて」『国際経営・文化研究』第19号第1号（2015年）：171-178頁／「19世紀後半のアメリカ社会と動物——バッファロー乱獲をめぐる議論の分析を中心に」『国際経営・文化研究』第18号第1号（2013年）：29-42頁／「19世紀初頭アメリカ合衆国における動物愛護——世紀転換期の政治情勢から見る社会的意味の考察を中心に」『国際経営・文化研究』第16号第1号（2011年）：27-40頁／「19世紀前半期アメリカの「家庭」における動物と「痛み」の感性——動物愛護が語られる場としての「近代家族」に焦点をあてて」『国際経営・文化研究』第15号第2号（2011年）：68-82頁／「19世紀後半の生体解剖反対運動についての研究動向と新たな展望——アメリカ社会における科学、ジェンダー、動物観を議論する意義を中心に」『国際経営・文化研究』第14号第2号（2010年）37-48頁／「暴力・女性・動物——「動物の権利」とフェミニズム」『ジェンダー研究』第5号（お茶の水女子大学ジェンダー研究所発行，2002年）：99-114頁。
- 2) 丸山雄生「ポストコロニアルからポストヒューマンへ——人種、ジェンダー、種の交差」荒木和華子他編『帝国のヴェール：人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店，2021年：118-135頁。
- 3) 引用は前掲書、p. 128.
- 4) 前掲書、pp. 132-133.
- 5) Kimberle Crenshaw, "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracial Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 1(8), 1989.
- 6) 引用は丸山、p. 130.
- 7) 例えばフェミニズムの立場から動物擁護論を展開するC. アダムズらは、動物の痛みを形骸化する私たちの日常意識を多数指摘している。キャロルJ. アダムズ著／鶴田静訳『肉食という性の政治——フェミニズム-ヴェジタリアニズム批評』新宿書房，1994年。
- 8) 引用は丸山、p. 132.
- 9) ロージ・ブライドッティ／門林岳史監訳『ポストヒューマン——新しい人文学に向けて』フィルムアート社，2019年／Rosi Braidotti, *The Posthuman* (Cambridge: Polity, 2013)
- 10) 前掲書、p. 30.
- 11) 詳しくは前掲書、pp. 87-144.
- 12) 引用は丸山、p. 133.
- 13) Sunaura Taylor, *Beasts of Burden: Animal and Disability Liberation* (The New Press, 2017)/ スナウラ・テイラー／今頭有梨訳『荷を引く獣たち——動物の解放と障害者の解放』洛北出版，2020年。
- 14) 引用は前掲書、p. 199.
- 15) 前掲書、p. 109.
- 16) 前掲書、pp. 106-148.
- 17) 引用は前掲書、p. 119.

- 18) 前掲書, pp. 112-113.
- 19) 前掲書, p. 118.
- 20) 前掲書, p. 226.
- 21) ブライドッティ, p. 133.
- 22) 詳しくはテイラー, pp. 210-229.
- 23) Callicott, *In Defense of the Land Ethic*, 130, quoted in テイラー, p. 349.
- 24) テイラー, pp. 337-361, 引用は p. 350.
- 25) チャールズ・バターソン／戸田清訳『永遠の絶滅収容所——動物虐待とホロコースト』緑風出版, 2007年／Charles Patterson, *Eternal Treblinka: Our Treatment of Animals and the Holocaust* (Lantern Books, 2002)
- 26) Claire Jean Kim and Carla Freccero, "Introduction: A Dialogue," *American Quarterly* 65(3), 2013: quoted in 丸山, p. 227.
- 27) バターソン, 第1部及び第2部を参照されたい。
- 28) 丸山, p. 227.
- 29) ブライドッティ, p. 284.
- 30) 例えば『現代思想』の特集号で「人間／動物の分割線」が取り上げられている。『現代思想』vol. 37-8. 青土社, 2006年。
- 31) 詳しくは宮崎裕助「脱構築はいかにして生政治を開始するか」前掲書, pp. 142-155.

主要参考文献

- 荒木和華子他編『帝国のヴェール：人種・ジェンダー・ポストコロニアリズムから解く世界』明石書店, 2021年
- アガンベン, ジョルジョ『人権の彼方に：政治哲学ノート』以文社, 2000年
- アガンベン, ジョルジョ『開かれ：人間と動物』平凡社, 2004年
- アダムズ, J. キャロル著／鶴田静訳『肉食という性の政治——フェミニズム-ヴェジタリアニズム批評』新宿書房, 1994年
- シンガー, ピーター著／山内友三郎監訳『実戦の倫理』昭和堂, 1999年／Peter Singer, *Practice Ethics*, (2011)
- テイラー, スナウラ／今頭有梨訳『荷を引く獣たち——動物の解放と障害者の解放』洛北出版, 2020年／Sunaura Taylor, *Beasts of Burden: Animal and Disability Liberation* (The New Press, 2017)
- デリダ, ジャック著／鶴飼哲訳『動物を追う、ゆえに私は（動物）である』筑摩書房, 2014年
- バターソン, チャールズ／戸田清訳『永遠の絶滅収容所——動物虐待とホロコースト』緑風出版, 2007年／Charles Patterson, *Eternal Treblinka: Our Treatment of Animals and the Holocaust* (Lantern Books, 2002)
- ブライドッティ, ロージ／門林岳史監訳『ポストヒューマン——新しい人文学に向けて』フィルムアート社, 2019年／Rosi Braidotti, *The Posthuman* (Cambridge: Polity, 2013)
- Callicott, J. Baird *In Defense of the Land Ethic: Essays in Environmental Philosophy* (State University of New York Press, 1989)
- Crenshaw, Kimberle "Demarginalizing the Intersection of Race and Sex: A Black Feminist Critique of Antidiscrimination Doctrine, Feminist Theory and Antiracist Politics," *University of Chicago Legal Forum*, 1(8), 1989.